

多様な植物でにぎわう草原を再生する

全体構想

取り組みの内容

多様な動植物が生息・生育できる草原の環境の保全と再生
 様々なタイプの入り交じった草原環境の保全と再生
 野草採草面積の拡大
 希少動植物の生息・生育地の保全



全体的な評価

今回提出された「活動結果報告」29件のうち、生物多様性に関連する活動は13件、そのうち主対象となるのは3件で、いずれも継続事業でした。

平成16年度から活動している「阿蘇花野再生プロジェクトステップ」では、トラスト地10haに加えて隣接する5haの地でも草刈り・草集めを実施。10年前は全てヤブだった15haが健全な草原に近づきつつあります。今後も引き続きデータを蓄積し、ススキ草原としての再生を目指します。

「花咲盛における生物多様性保全活動」は、個人で保全活動を行ってきましたが、昨年秋のNPO法人化により運営体制を一新、研究者や学生の協力により活動を続けています。野の花観察会には延べ600名近い参加があり、学術研究成果の論文も公表されるようになりました。

以上、2つの活動では、生物多様性豊かな草原を目指して、会員や地元の方々、さらにはボランティ

アなどとの協力・連携により野焼きや草刈りなど地道な維持管理作業が継続的に行われ、その成果として草原特有の植物の復活も報告されています。

「地域生物多様性保全事業（湿地の調査と保全実証事業）」では、研究者やボランティアの連携により北外輪山の試験地3カ所で実証事業が行われました。3年間の助成事業は終わりましたが、今後もデータ蓄積が続けられます。

広大な阿蘇の草原を生物多様性の面から健全な状態で維持していくためには、牧野利用・維持管理が適正に続けられることが大事です。環境省では、草原の生物多様性の評価手法の検討として、牧野組合の人々などが日常的に草原の状態をチェックできるようマニュアルづくりを進めています。この成果を生かし、ゆくゆくは環境支払い制度等に結びつくような形になることが期待されます。

< 生物多様性に関連する活動結果報告 >

| NO | 事業・活動名 | 担当 |
|----|---|----|
| 12 | 阿蘇花野再生プロジェクト ステップ ～ 放置人工林伐採による生物多様性豊かな草原の再生～ | |
| 13 | 花咲盛における生物多様性保全活動 | |
| 14 | 地域生物多様性保全事業（湿地の調査と保全実証事業） | |
| 1 | 原野（やま）の恵み、先人の知恵を木落原野の未来へ（H25年度） | |
| 2 | 野焼き放棄地の野焼き再開による草原再生 | |
| 3 | 野焼きによる管理体制作り | |
| 4 | 牧柵点検、輪地切り、野焼き | |
| 5 | 古閑牧野の維持管理と地域の交流会 | |
| 6 | 野焼きボランティアの受け入れ | |
| 7 | 輪地切り支援ボランティア活動 | |
| 8 | 野焼き及び輪地切り支援ボランティア活動 | |
| 9 | 牧野組合毎の牧野カルテ作成支援 | |
| 10 | 野焼き作業の省力化及び野草地利用を支援する作業道、防火帯等整備事業 | |
| 15 | 草原環境学習及び草原維持活動 | |

NOは各活動の掲載番号に対応 🌟 = 奨励賞を受賞した活動

牧野管理小委員会における協議の対象： = 主対象となる活動 = 関連する活動

阿蘇花野再生プロジェクト ステップ

～ 放置人工林伐採による生物多様性豊かな草原の再生～

実施主体 NPO法人 阿蘇花野協会
 実施場所 Pro Natura Reserve 阿蘇花野トラスト
 (阿蘇郡高森町野尻)
 実施期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日



背景・ねらい

阿蘇花野協会では、阿蘇地域の希少な草原性植物が集中する山東原野のホットスポットで10haの土地を取得し、ナショナル・トラスト活動を続けている。平成16年から5年間をかけ、放棄地5haを野焼き・草刈りなど伝統的な草原管理手法により生物多様性豊かな草原に再生した。

平成22年度からは、新たに3年計画で、約50年間放置されていた杉の人工林1haを伐採するとともに、残された放棄地4haを野焼きによって草原に戻し、さらに草刈り・草集めなどの作業を行って、花咲く草原5haを再生する。伐採・野焼き前後には、熊本大学や地元農家、関係機関と連携して植生・植物相を調査するとともに、ヒメユリやユウスゲ、フクジュソウ等の地下茎バンクなどについて科学的データを蓄積して、阿蘇花野再生プロジェクトの効果や重要性を啓発する。

実施概要

伐採跡地の植生・植物相、シードバンク・地下茎バンク調査(平成25年4月～10月)

草刈り、草集め(平成25年10月)

防火線づくり・野焼き・灌木除去(平成26年2月～3月)

・3月の野焼きは、3月8日の予定であったが、70cmを超える大雪と天候不順のため3度延期して、3月22日ようやく実施することができた。

阿蘇野の花観察会(平成25年4月、7月、9月)

・観察会では、毎回20名前後の参加者がトラスト地の四季の植物を観察した。特に、放置人工林伐採跡の植生観察を会員全員で行った。本年は、伐採跡地にサクラソウが復活しているのを確認することができた。

本会の活動の詳しい様子は、会誌「花野たより」に掲載。

<http://www.asohanano.com/archive.html>



成 果

トラスト地10haに加えて隣接する5haの草刈り・草集め・野焼きを実施して15haを草原として維持管理できた。活動への参加者は、観察会が各回20名から30名、草刈り・草集めがそれぞれ20名ほど、野焼きが32名の参加であった。

伐採跡地の植生は、草原状態に戻っているものの、セイタカアワダチソウなどの帰化植物やクマイチゴなどの灌木が優占していて、本来の阿蘇の草原とはほど遠いものである。

今後、野焼き・草刈り等を繰り返して、ススキ草原として再生していきたい。

実施者の感想

3年間の成果を、「阿蘇花野再生プロジェクトステップ ～ 放置人工林伐採による生物多様性豊かな草原の再生～ 調査報告書」としてまとめることができた。また、その内容を熊本大学で行われた植物分類学会第13回大会公開シンポジウムにおいて報告することができた。3年間の助成期間は終了したが、引き続きデータを蓄積していきたい。

13 花咲盛における生物多様性保全活動

実施主体 宇野公子（花咲盛）
実施場所 花咲盛野草園
実施期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日



背景・ねらい

花咲盛野草園内の草原植物で絶滅の危機に瀕している希少種の保全と再生を図るため、草刈り、草集め、野焼きを継続的に実施し、野の花観察会を行い、草原の生物多様性保全に向けて普及啓発を行っている。2013年10月3日に、「NPO法人花咲盛」と名称を改め、東海大学及び熊本大学の教授、準教授を副理事長と理事に指名し活動を開始、多くの学生会員が事務局を運営している。

多種の希少な花々を守り、自然を損なうことなく、維持・管理及び学術研究をする為に、会員、学生ともども、総力を上げて継続実施している。

実施概要

【平成25年活動内容】

花咲盛野草園における野の花観察会 4月～9月に実施、延べ参加人数は584名

- ・4月：8回、延べ108名
- ・5月：10回、延べ98名（うち学生5名）
- ・6月：10回、延べ167名
- ・7月：9回、延べ110名（うち学生10名）
- ・8月：5回、延べ72名
- ・9月：2回 延べ29名（うち学生4名）

輪地切り・輪地焼き

- ・輪地切り：10月12日18名（グリーンストック）
10月27日3名（会員による） 10月31日3名（会員による）
- ・輪地焼き：11月2日14名（グリーンストック）

草刈り

- ・草刈り：11月5日2名/11日3名/30日4名/12月5日7名（グリーンストック）
- ・草集め：12日6名（会員）、平成26年3月8日 23名（うち学生10名）

野焼き（平成25年度）

- ・実施面積：約5ha
- ・参加者：グリーンストック26名、地元の方（火入れ）3名、
学生会員2名、事務局長

成 果

- ・平成25年に復活した花（例）オキナグサ、パーソブ
- ・英語の査読付き論文である *cytologia* にて、学術研究成果を公表した。

実施者の感想

イノシシ、シカによる野生動物被害をふせぐネットを取り付けた。昨年はどうにかうまくいったのだが、時がすぎるとイノシシが冬場の間に掘り起こしてしまい、マツモトセンノウの根を傷め、芽立が悪くなった。一方、NPO法人化及び学生による活動への積極的参加で野草園を後世に残すための希望がもてた。



実施主体 公益財団法人阿蘇グリーンストック
 実施場所 阿蘇市北外輪地域
 実施期間 平成25年6月28日～平成26年3月25日



背景・ねらい

平成22～24年度調査を行った6ヶ所の生物多様性保全計画地の内、阿蘇地域における生物多様性保全上特に重要度が高く、かつ阿蘇地域の生物多様性保全スポットのモデルになると思われる湿地の総合的な保全計画策定に向けた、植生（植物図の作成）及び植物相（フローラ調査）等の詳細調査を行う。保全対策が緊急に必要と思われる3ヶ所の調査地点について、ボランティアによる「草刈りと野焼き実施による湿地再生及び生物多様性復元活動（実証事業）」を行う。

実施概要

- ・第1回専門家委員会を開催（H25年7月23日）し、これ迄の結果を踏まえH25年度の保全実施事業の方法・時期及び効果測定と評価方法を検討した。
- ・上記検討での策定をもとに保全活動（湿地再生及び生物多様性の復元のための保全対策、保全対策の効果測定、湿地の現況確認、その他）を実施した。
 - < 保全対策の実施状況 >
 - * 井手湿地A周辺部の草刈り：ノカンゾウの保護 / 8月7日、事務局2名・ボランティア16名
 - * 井手湿地Bの草刈り / 8月29日、事務局2名・ボランティア17名
 - * ワクド池の輪地切りと野焼き / 3月25日、地元牧野組合13名・事務局2名・ボランティア9名
 - * 保全対策実施の「前」「中」「後」に専門家による効果測定のための調査及び結果の整理・検討
- ・第2回専門家委員会を開催（H26年3月12日）し、各事業の効果の評価・検討を行った。
- ・保全計画の実施方法等を地元や関係機関へ周知するためにパンフレットを作成した。

成 果

井手湿地A周辺部の草刈り：ノカンゾウの保護

- ・H23年度と比べ開花茎数の大幅な減少が観られ、その要因としてH23年度は6月に行った草刈りをH25年度は8月に行ったことが考えられ、今後は6月に草刈りを行い調査を継続していくことの必要性を確認した。

井手湿地Bの草刈り

- ・H23年度の調査結果と比較すると多くの調査ポイントで草丈が低くなっている。確認された種数の増減はポイント毎に異なるが概ね増加している。又、作業時間・苧草の量も減少していることが確認された。以上のことから草丈を低くすることに効果があったと言える。

ワクド池の輪地切りと野焼き

- ・輪地切り延長：153m・幅3～5m、野焼き面積：約6.2ha
- ・湿地の保全のために輪地切り・野焼きが行われてきたが、H24・25年度は地元牧野組合の意向もあり、野焼きの範囲が大幅に増え、生物多様性の保全に重要な野草地が拡大した。これらの場所の野草が採草され有効に活用されたという成果があった。

牧野組合による機械での防火帯作りは1,457m（幅4～6m）

実施者の感想

H23年度から始まった実証事業の一つの区切り、まとめとして取り組んで来た。その結果、短期ではあったものの一定の成果を得ることが出来た。しかし生物多様性保全のための実証事業として、より正確な記録や判断材料を得るにはまだまだ決定的に実証期間が不足している。そこでせっかくの成果をより確実に生かしていくためにも、今後数年間は継続し草原管理手法についてより正確な記録を集め発表していく必要がある。